
ツレヤん... ?

yuunagi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツレヤん・・・?

【Zコード】

Z0274BA

【作者名】

yuuna おー

【あらすじ】

入院中だったミカエルこと新堂慎は仲間たちに退院祝いの飲み会の席を設けられてそれに参加するが、途中で気絶してしまい宴は即、幕を閉じる。その翌日、慎は久しぶりに登校する私立夕凪学園に妹の新堂杏を背負いながら向かう。その道中、友人である菅谷涼や幼馴染である摺木麻耶と再会するのだが……。

プロローグ／ヒーロー凱旋／前篇 其の一

市内某所。

人々が賑わいを見せる繁華街……。

仕事帰りのサラリーマンなどが居酒屋に立ち寄り、酒を飲みながら談笑を交わす騒がしい場所から少し離れた路地裏には一見さんはばかられる一軒のバーがあつた。

Broken Angel Wings（翼が折れた天使）と怪しく光るネオン看板が軒先に下げられ、クリスマスでもあるまいし色鮮やかに光の装飾が施された外装のバーにぞろぞろと入つて行く不審な人物たちがいた。

その者たちは服装こそバー カー やラスース、ドレスと統一性がないものの一つだけ共通点があつた。それは彼らの服装のどこかには必ず白い翼のプローチが付いていた。

彼らはバーに入るすんでの所で持参した仮面を付けて店内に入つて行く。傍から見れば仮装パーティの参加者たちに見えなくもないメンツである。

店内は薄暗く、カウンター席とテーブル席があり、パーティをするには少々狭いフロアながらも先着順から空いている席に通され。残つた者は案の定、立ち飲みとなつた。

人でひしめきあう店内だが一席だけ テーブル席が空いているにも関わらず誰もそこには座ろうとはしなかつた。誰かのために残しているような風にも見受けられる。

そのテーブル席の傍には演壇があり、各々好きな飲み物を手に取つた者が次々と演壇に熱い視線を送り始める。特に何かがあるわけでもないそこに視線を向ける必要があるのだろうか？

すると、突然店内が真っ暗になり来場者たちが少しづわめき始め。それを見計らつて演壇に向けてスポットライトが照らされ、何

かに気付いた来場者たちは歓喜して店内が少し揺れ動いた……。スコットライトの先には白と黒の対極的な色ながらも左右対称で目元には水滴模様が描かれた仮面を付け、白いワイシャツに白い翼のブローチを身に付けるその下にはジーンズというラフな格好をした人物が立っていた。

仮面の人物は歓喜に沸いた来場者たちをなだめようと両手を小さく上下に動かして、キザな対応をとる。

しばらくして、店内は静寂に包まれて仮面の人物は自分の姿を後方にいる者にも見せつけようと演壇の縁まで足を運んで丁寧にお辞儀をして、徐に口を開いた。

「 皆さんお久しごぶりです。無事、この地に舞い降りる事が出来てこれも皆さんのおかげだと思います。ありがとうございます」

静かにそう語ると来場者たちのボルテージが再び上がつて店内がまた揺れ動く。仮面の人物は再び来場者たちをなだめて制止させる。

「 ゴホン、えつと……まどろっこしい事はナシにして皆でパ一ツとやりましょう！ かんぱーい！」

右手に持っていた何も入っていないグラスを掲げて乾杯の音頭を取ると来場者たちも仮面の人物に釣られて一斉に「乾杯！」と嬉しそうに告げた後に飲み物を一気に飲み干して各自談笑に入った。

仮面の人物はゆっくりとした足取りで演壇を後にして、演壇の傍にある 彼のために空けられていたテーブル席に腰を掛けると小さく息を吐いた。
久しぶりの集会で緊張していただけにボロを出さずに無事終えてホッとしたようだ。

「お帰りなさい、ミカエル」

テーブル席に腰掛ける仮面の人物の事を「ミカエル」と呼んで何のためらいもなく隣に腰を掛けたボブカットの少女は蝶をモチーフにした仮面を付け、服装もどこかの制服なのだろうか、セーラー服の上にエプロンを着用していた。

少女はさり気なくミカエルと呼んだ人物の前に飲み物が入ったグラスを置き、それにミカエルは手を伸ばして飲み物を口に含んだ。すると、ミカエルが突然、飲み物を勢い良く噴き零して苦しそうにむせ返る。

「……コレ、何?」

「健康ドリンク?」

「何故に疑問形?」

「いや、おマスターが『祝いだ、持つてけ』って……」

少し申し訳なさそうに語りながら少女は自分たちが座るテーブル席の向かい側にあるバー・カウンターに視線を向け、ミカエルも少女に釣られるように視線を向けた。

視線の先にあるバー・カウンターには雑貨屋によくある定番の髭メガネを付け、親指を立てて口元を緩め白い歯を光らせる中年男性がいた。

そんな中年男性の姿に二人は額を押えて大きく嘆息をした。

「で、コレの中身は何?」

「……知りたいの?」

「いや、やっぱやめとくわ。世の中には知らなくても良い事があるもんな……」

「うん、私もそれには同感……」

意見が合つた二人は謎の液体が入つたグラスに視線を向けて凝視した。

グラスに入った液体は無色透明で一見普通の飲料水に見えなくもない代物なのだが、先ほどの事があるので普通の飲料水ではないのは明らかだった……。

「でもさ、飲む前に気付かない？」

「え？ 何が？」

「コレ、結構臭いよ……」

顔を引きずりながら徐に鼻を摘む少女にミカエルは首を傾げる。

「生憎、鼻が詰まって良く分からん」

「そう。それは不運と言うべきか幸運と言つべきか悩む所ね」「そんなにヤバい匂いなのか？」

「うん。ミカエルが話す度に匂いが来るよ」

「マジか。それは……うん、『めんなさい』

「いやいや、こちらこそ何かごめんなさい」

互いにお辞儀の応酬でしばらく変な流れが続いた。談笑していた

来場者たちもそのおかしな光景に気付いて、怪しげな笑みを浮かべながら一人のやりとりを見つめる。ニヤニヤと自分たちを見つめる視線に気付いた二人は頭を搔いて照れながら苦笑いをした……。

すると、仕様もない所をメンバーに見られてしまったミカエルが名譽挽回と言わんばかりに突然、グラスを手に取つて立ち上がった。その行動に来場者たちは湧いたが少女だけは違つた。ミカエルが手に取つたグラスは未だに原材料が分からぬ物を使用して作られたあの謎の液体が入つたグラスだつた。そして、ミカエルがこれら何をしようとしているのかは流れ的に理解出来ている少女は少し顔を引きずりながらも心配な眼差しで彼を見つめる。

『一気！ 一気！ 一気！』

手拍子を交えながら一気コールが店内に響き渡る。

その勢いに身を委ねてミカエルは謎の液体が入つたグラスを口元に近づけるとためらう事なく口に含んで、喉を鳴らしながら一気に飲み干した。飲み干して空になったグラスを掲げると店内は歓声に包まれて、ミカエルは口元を緩める……。

会場の反応に安心したのか 突然、ミカエルはグラスを掲げたまま前方のテーブルに倒れ伏せる。卓上の物は全てその衝撃で転げ落ち、床一面に飲料水が飛散した。

唐突の事で呆気に取られた面々だったが、良く見るとミカエルの身体が小刻みに震えており、痙攣している事に気付く。

『//カエルーつ？』

店内に悲鳴が響き渡り、飲み会どころじゃなくなつてしまい。久しぶりの集会は早々に打ち切られたのであつた……。

プロローグ／ヒーロー凱旋／前篇 其の一

ミカエルさんが来場しました。

ミカエル「こんばんは～」

ラファエル『こんこん』

ガブリエル こんばんみ～

ガブリエル 今日、ミカエル再臨祭があつたんでしょ？ どうだつた？

ラファエル『どうもこりとも……』

ミカエル「……」

ガブリエル ？

ラファエル『マスター特製ドリンクを調子付いて一気飲みし、気絶しましたよ。折角の集会がパーです』

ガブリエル それはそれは、思い切った事をしなさつた……

ミカエル「……すまん」

ラファエル『まあいいですけど……。それよりもガブリエルさんはどうして来なかつたんですか？』

ガブリエル そうだね～。おんにやによ子が離してくれなかつたんだよねえ～

ラファエル『……まだですか』

ガブリエル 仕様がないつしょ。だつて、モテんだもん

ラファエル『はいはい……』

ガブリエル まあ～あれだよね。ミカエルくん、無事でなにより

ラファエル『うん、お帰り』

ミカエル「何だよ、改まつてさ。キモいわ」

ガブリエル 素直じやないねえ～

ラファエル『でも、ミカエルらしいでしょ？』

ガブリエル 確かに……

ミカエル「馬鹿にされているような気がするが……。でも、あり

がとう』

ラファエル『www』

ガブリエル 今、悪寒が走ったわ……

ミカエル「捨てた女の怨念じゃね?」

ラファエル『ああ、それはありえるね』

ガブリエル……ヤな事言わないでよ』

ミカエル『www』

ラファエル『www』

ガブリエル もう、イジメはんたゞい

ラファエル『子供ですか……』

ミカエル「さてと、そろそろ……」

ラファエル『そうですね』

ガブリエル『だね』

ミカエル「じゃ、明日からまたよろしく『

ラファエル『こちらこそ』

ガブリエル『よろしく』

ミカエル『おやすみ』

ラファエル『おやすみなさい』

ガブリエル『おやす』

ミカエルさんが退場しました。

ラファエルさんが退場しました。

ガブリエルさんが退場しました。

……。

レビューアさんが来場しました。

レビューア【渡さないわたさないワタサナイ……。絶対に渡さない。必ずアナタを救つてみせる。そして、今度こそ殺す。殺すころすロス。ぜつたい、殺してみせるから。だから、だから もう、どこにも行かないでずっと傍にいて……】

レビューアさんが退場しました……。

第一話「久しぶりの登校」 其の一

身体がダルイ。

いや、身体が重いと言つた方が合つているのだろうか？
寝返りを打つにも身体が思うように動かない。金縛りに遭つて
いる……？

いやいや、そんな非科学的なモノは信じないぞ。それに金縛りつ
て要は脳が起きているにも関わらず身体がまだ眠つた状態で動かな
い事を指すんだろ？ でも、手だけは動くからこれは金縛りじゃな
い。だったら、何が原因なんだろうか？ 目を開ければその原因が
分かるのだろうか？

ふむ、このまま眠り続ける訳にもいかない、か……。

俺は原因を突き止めるべく、ゆっくりと閉じていた目を開ける。
徐々に明らかになつて行く瞳に映る景色の中に馬乗りになつてこち
らを凝視しているセーラー服姿の人物が現れた。

「にいに～、私を学校に連れてつて」

上目遣いで媚びるよに開口一番にアホな発言をした、ボサ髪童
顔の八重歯が特徴的な小悪魔少女に俺は 開けた目をゆっくり閉
じてもう一度寝る事にした。

うん、疲れているんだな、きっと……。だから、この部屋に居や
しない少女の姿が見えるんだ。ナンマイダブツナンマイダブツ……。
これで少女の靈は報われた事だろう……。
さて、もう一眠り グホツ！

「にいに～起きてよ～。起きないと遅刻するよ～」

僕の身体の上で馬乗りになつていた少女がなかなか起きない俺に

制裁と言わんばかりに跳ねていた。その反動で少女の全体重が俺の腹部を圧迫する。

「分かった。分かったから腹の上で跳ねんな。吐くぞ、このヤロ

観念して俺は目を開けて少女に苦言を呈した。

ようやく起きた俺の事を少女 新堂杏しんじょうあんは何故か分からぬが徐に鼻を手で摘んだ。

「……にいに、臭い」

「これが年頃の少年の匂いだ。臭けりやー部屋に入つて来るな

「ふう」

フグみみたいに頬を膨らませて拗ねた杏の膨らんだ頬を驚拘みにして俺は杏が言う悪臭の元であるつ口臭を吹きつけてやつた。あまりの臭さに杏の目が充血し、涙を浮かべながら苦悶な表情を浮かべる。だが、悪臭から逃げようにも俺に頬を驚拘みにされて逃げ場を失つてしまつた杏はそのまま白目を向き気絶した。

凄い効力だ……。昨日、あれほど噛むタイプのブレスケアを口にしたにも関わらずこれほどの威力を發揮するなんて、俺の身体に一体何があつたんだよ……。

俺は小さく息を吐いて肩を落とした。

昨晩、気が付いたら行きつけの店のソファーの上だつた。そして、何故だか俺の口に三重にしてマスクが付けられていた。

首を傾げながら、マスクを外そうとしたら俺の事を看病していたであろう桜乃美嘉さくのみかに腕を掴み取られて「外しちゃダメ！」と叱られてしまつた。

何故、外しちゃならんのか状況を理解出来ていない俺に桜乃は優しく微笑み掛けながら俺の手に一箱の噛むタイプのブレスケア（グレープ味）を握らせていた。

俺はどうしてか手中に収めるそれを眺めていると頭が熱くなつて来ていた。それだけである程度の状況が理解出来たからだ。

……はあ～。

俺は未だに腹の上で白目を向いて氣絶をしている杏の襟元を掴んで引きずりながら部屋から放り出した。そして、扉を閉めるとドアの上段部分から順番に錠を掛けに行く事　　八つ目を掛け終えて、俺はベットにダイブをして横になつた。

ふう～、これで邪魔者は居なくなつた。これで心置きなく、眠れガチャーン！

「にいに～　どうしてこんなにも可愛らしい妹を放り出すかなあ～？　考えられないよ～！」

頬を膨らませながら部屋の中にドカドカと激しい足音を立てながら可愛らしい（？）我が妹が入つて来た。

「……どこの世界にピッキングする可愛い妹が居るんだよ」

「ぴつきんぐ？　何、意味分かんない事を言つているの？　普通に開けただけだよ」

「じゃ～何だ、その細長い工具の数々は……」

俺は杏が手に持つっていた、ピッキングに使用したであろう工具に視線を向けた。指摘された杏は証拠隠滅とばかりにすぐさま工具を懷に隠したがバレバレである。

「ヤダなあ～にいには……。杏は何も持つてないよ～」

「……なら、跳んでみろ」

「何、そのカツアゲ的な命令。にいに、怖い～」

「そうか……。なら、身体検査だな」

俺は立ち上がり杏に近づいて行つた。

「え？」

俺の発言に杏は素つ頓狂な声を上げて間抜け顔をさらした。そして、言葉の意味をどう解釈したのか分かりかねるが突然、頬を紅く染め瞳をつぶつぶとさせて少し怯えたような視線をこちらに向けて

来た。

「……優しくしてね。にいこ」

「はい？」

甘ったるい声で発せられた杏の言葉に僕は首を傾げた。
えつと……どう対応したらいいのか分からん。

「ほら、早く。ここがドクンドクンって、なってるよ。ここに」

杏は俺の腕を掴むと徐に皿らの胸に俺の手を押し当てる。触れた杏は声を殺して堪えていたが、正直の所そこは何もなく見渡す限り水平線が広がっていた……。

「……ね？ ドクンドクンってなってるでしょ？」

頬を紅く染めて恥ずかしそうな表情を浮かべながら杏は口走った。
だけど、

「ああ、そうだなあ。虚しさだけが心に染みる……」

俺は押しつけられていない空いた腕を自分の胸に置いて、猛省した。

言葉の綾（？）とは言え、妹の慎ましい胸を触らせてもらひつ変態的な流れを作つてしまい申し訳ない。妹よ、これからだ。これからお前の平地に立派な双丘が出来上がるだひつ……。だから、めげずに頑張れよ、杏……。

「……ね、にいこ。何で涙ぐんでいるの？」

「それはね。男の子だからさ」

「男の子は女の子の胸を触りながら泣くの？」

「そうだねえ。だけどね、これは神様の不公平さに悲観した涙なんだ」

「不公平？」

「そうだよ。じつして女の子（妹だが……）のお胸を触れさせてもらひつているのに得るモノがないんだ」

「それって……どういう事？」

「つまり、掴め グフツ！」

「にいにの馬鹿！ 变態！ モボ！」

ガチヤン！ と杏は扉を勢い良く締め、俺に鳩尾への打撃による痛みだけ残して出て行つた……。

ふん、これでいいわ……。その悔しさをバネに立派になるんだぞ、杏……。

杏の攻撃が心にまで響き、俺は膝から床に崩れ落ちてそのまま床に倒れ伏せた。

……。

……よし、学校に行く準備でもするか。

俺はさつさと起き上がりてクローゼットから制服を取り出して着替え、桜乃に渡されたマスクを即身に付け、囁むタイプのブレスケア（オレンジ味）はスクールカバンに忍ばせて自室を後にした。

俺の部屋を怒つて出て行つた杏が玄関先で靴を履いており、俺の姿を見るや否や舌を出して憎たらしい態度を取つて來た。だけど、先に靴を履き終わつたにも関わらず座つたまま動こうともしない杏の姿を見て、僕は嘆息をした。

また、か……。

頭を搔きながら俺も靴を履いて、徐に杏が座る前に腰を下ろした。すると、待つてましたと言わんばかりに杏が俺の背中に乗りかかつて来て、俺は杏が落ちないよう支えながら立ち上がって背負う形になつた。

杏が俺の部屋に忍び込んで目覚めた俺に向かつて開口一番に言った言葉通りだ。私を学校に連れてつて、つまり俺が杏を背負いながら一緒に登校する事である。

「じゃー出発進行！」

俺の背中ではしゃぎ始めた杏に呆れながら、俺たちは学校に向かって出発した。

外を出てしばらく歩いていると案の定、近所の方々が奇異な視線で俺たち兄妹を見つめて来だが、別に気にならなかつた。ほぼ毎日の事で慣れてしまつていてるからである。ホント、慣れつて怖いよな……。

だけど、幼い頃からこんな仲睦まじい間柄ではなかつた。もう少し、ドライな関係だつたと思う。ドライと言つても全く口を利かなかつた訳ではない。ここまで身体を密着して接し合つ仲までではなかつた。

杏が言つには空白の三年間の埋め合わせだそうだ。

ふむ、埋め合わせを補つためにここまでベタベタされちゃう困るんだがな……。一応、血の繋がつた兄妹とは言え、お互い年頃の少年少女なのだから周りの田も気にしてくれ……。

「ねえ～。にいに」

「何だ？」

「昨日、どこに行つてたの？」

「どこだつていいだろ？」

「ふう～。必ず尻尾を掴んでやる」

「……そんな活力があるなら自分の足で学校行けや」

「ゴホン、ゴホン。ごめんね、にいに……。いつも杏の身体を心配して背負つてくれて……。杏、嬉しいよ」

「その病弱キャラはこれで何回目だ？」

「びょうじゅくさやう～。にいに、酷いよ～。杏が昔から身体が弱いのを知つているくせに、ゴホン……」

「はいはい」

聞き分けのないアホな妹の話を軽く流す事にして俺は黙々と足を進める事にした。俺の華麗なる対応に杏はこれでもかと言つほどこワザとらしく咳き込み始める。背中から聞こえる耳障りな咳を無視しながらじばりくちを進めていると突然、肩をポンと叩かれた。

俺に無視されて痺れを切らした杏が注意を引くためにやつたんだ
と思いながら、無視しているとまた肩をポンと叩かれた。先ほどよ
りも強い力だつた。

「何だよ、杏」

そう言いながら俺は視線を後ろに向けると杏じゃなくて一ヤーヤ
と氣色の悪い笑みを浮かべる制服姿の美少年がいた。

「相変わらず、仲がいいねえ。お一人さん」

シャレた髪形をした茶髪に端正な顔立ち、やや細身のチャラ男こ
と菅谷涼が俺に背負られている杏の頭を撫でる。

涼とは中学の時に知り合い、現在はお互別々の学校に通つてい
るものたまにこうして登校時に出くわしたりする。

「お前、時間大丈夫なのか？」

彼が通う学校は僕らのように徒歩で行ける距離じゃなく電車を使
用して行かなきやならないような場所にある。だから、友人として
悠長に歩く彼の事を少し心配した。

「大丈夫大丈夫。しつかりシフトがオツムに入つてているからこの
まま行けばギリギリ間に合う。んな事よりも留年生は大丈夫なのか
い？」

「誰が留年生だ」

「え？ 進級出来たん？」

「まあ～ギリな……」

「なあ～んだ。てつきり留年したと思つてたから、慎しんをからかお
うとわざわざ遠回りまでしたつてのに、無駄足かね……」

「最低だな、お前……」

はあ～、と俺は嘆息を吐いた。

俺は別に成績の影響で留年しかかつた訳ではない。一年の秋辺り
に入院する事になり出席日数の都合で留年を危ぶまれた。だけど、
前半休まずにがんばったおかげかその貯金でプラマイゼロで事無き

を得る事が出来たのだ。

「でもさ～。に～にも不運だよねえ～。襲われた女の子を助けようとして果敢にも首を突っ込んだのは良かつたものの、その結果が長期入院に留年ギリセーフの心臓バクバクコースを選んじゃったんだもん」

「杏ちゃん杏ちゃん。その女の子からしたら慎兄ちゃんは正義のヒーロー様だから、あまり言いなさんな。まあ～第一、その女の子を襲った犯人様までもかばつちゃうほどのお人良しさんに言つてもしょうがないけどね～」

そう言いながら俺の事を怪しんでジト目で見つめて来る涼に俺は堂々とした態度で睨み返した。

「ホント……おつかないな～。だけどさ、心配して言つているつてだけは分かつてちようだいな。第一、目撃者が慎と」

「おはよう、新堂くん。杏ちゃん」

と、突然俺たちに挨拶だけを投げかけて少女がスタスタと歩いて行つた。

「わお～。これはツイてるね～。まさか、すみやか摺木嬢に会えるとは…」

…

前方を歩く少女の背中を見つめながら言つた涼の頬は緩んでいた。
摺木麻耶するきまや、容姿端麗、文武両道。クールな立ち振る舞いとそのルックスから他校生の男子までも虜にするモテモテ美少女だ。腰の辺りまで伸びた黒のツインテールに前髪も綺麗に均等に整えられ、モデルのようなスレンダーな身体付き。体型にぴたりと合つた我が校の制服姿が凛々しく、常に欠かさず身に付けている白色の手袋が気品に溢れており、奥床しい乙女然とあまり肌を露出しない彼女は俺の背中にいる寸胴とは大違いである。
摺木と幼馴染の俺としては彼女の著しい成長に少し戸惑つてしまふ事しばしば……。

「ホント、麻耶姉～はいつ見ても綺麗だな～」

摺木の魅力に同性である杏が見惚れてしまつたようだ。そんな、我が妹に友人の涼は優しく微笑み掛けながら杏の頭にポンと手を置いた。

「大丈夫さ、杏ちゃん。これから劇的に成長するよ」

「本当？ 涼兄～！」

「ああ、本当さ。数年したら杏ちゃんもポンキュッポンになつてるさ」

「キュッキュッキュッじゃなくて？」

「うんにゃ～。キュッポンキュッじゃなくてね」

『うひひひ～』

何の笑みか知らんが一人して口元を隠しながら氣色の悪い笑み浮かべる。その姿は傍から見ればこれから悪巧みをしようとしている小悪党にしか映らないだろう。

「アウッチ。僕とした事が、摺木嬢の連絡先を聞くのを忘れていた……」

突然、額を押えて涼は悔しそうに口走る。

「いや、涼兄には無理だと思うよ」

「む、今の言葉は聞き捨てならないねえ～」

「だつて、麻耶姉の浮いた話なんて全然聞かないもん。そもそも、男の子には興味がないんじゃないかって、言われているぐらいだよ」

「……お前つて、そういう類の話好きだよなあ～」

確かに摺木の浮いた話なんて聞いた事がなかつた。ほとんど、どこの有名な男子生徒をこつ 酷く振つたやら、同性から告白されたなどの仕様もない噂話が校内では飛び交つてゐる。

「うん！ 噂話は淑女の嗜みつてね」

「絶対違うと思つぞ～」

「僕も同感～」

「ふう～ふう～」

自論を否定されて拗ねてしまつた杏をスルーする対応に至つた俺

たちは途中まで一緒に登校し、しばらく進んだ先にある交差点で涼は駅のある方向へ、俺たち兄妹は学校がある方向に別れて、各自が通う学校に向かった……。

第一話～久しぶりの登校～ 其の一

私立夕凪学園。

小中高の一貫校でエスカレーター組と外来組が入り混じる大所帯のマンモス校だ。

校風もかなり自由で法を犯さなければ何でもありである。だから、服装も私服のヤツが居たり俺のようにきつちりと制服を着用しているヤツもいる。

妹の杏は今年から晴れて高一なのだが、中一から着ていたセーラー服が未だに着られるので渋々ながら着用している。本当は高等部用の制服（ブレザータイプ）を着たくて両親に駄々をこねたらしくが通用せず現在に至っている。

俺は心身ともに順調に成長を遂げたのでおかげさまで高等部用の制服である。ちなみに中等部用の制服は学ランとセーラー服で初等部用の制服はお坊っちゃん、お嬢様が着用するような「じがんまり」とした物だ。

杏を背負っている俺はまず、杏を自身の教室に送り届ける事にした。いや、送り届けなければ周りにいる生徒達からの熱烈な視線が解除されない。

全く、モテる男はつらいぜ……。

少し照れながら杏の教室に向かっているとバリボリと何かを頬張る音が聞こえた。
まさかな……。

「なあ～それおいしか?」

「ふおいふいよ～」

「ああ? もう一回言つてみろ

「ゴクン。おいしいよ~」

陽気な返答に俺は少し立ち眩みを覚えた。

人に背負わせておいて自分はお気楽に食事と来た。それはそれは

……食べカスが服に付着している事だらうな~。

「お客さん。申し訳ないんですが、車内は飲食禁止なんですね~。

お控願えますか?」

「モウマンタ~イ!」

「こつちは問題ありだ! つたく、着いたぞ~」

仕返しとばかりに俺は杏を支えていた腕を解いて、そのまま振り落とした。杏は突然の事でそのまま廊下に尻餅をついて「ふぎや!」と奇声を上げる。そんな杏の姿はティベアに見えなくもなかつた。

「にいに、酷い

強打した臀部を労わりながら立ち上がつた杏に少し睨まれたが俺は悪怯れる事無く、その様を鼻で笑つて軽くあしらつてやつた。

「い~だ!」

ガキみたいな事を言い残して杏は自身の教室である一年二組に入つて行つた。それを見送つた俺は小さく息を吐く。
やつと、解放されてホッとした。これで心置きなく自由な行動がとれる。腕を頭上に掲げて伸びをしながら俺は自身の教室 一年二組へと向かつた……。

私立夕凪学園、高等部校舎二階。

俺が二年二組の教室に入るや否や、突然クラッカーの音が鳴り響いた。

クラスメイトたちが退院して久しぶりに登校する俺に向かってそんな言葉を投げかけて来た。

正直、突然の事で頭が真っ白になつたが状況を呑み込めるようになつた瞬間、顔が熱くなる。

「あ、ありがとう……」

照れのせいで少し口ごもつたが言いたい事を言えたと思う。だけど、どうして俺が入院していた事を知つているのだろうか？ 一年の時の同級生が口を滑らして話してしまつたのだろうか？

ふむ、考えてもしようがないか。ここはありがたく気持ちを素直に受け取るとしよう。

すると、小柄のなよなよした女々しい男子生徒がか細い声で「こ、こちらへどうぞ」と俺の事を誘導し始めた。その男子生徒のご厚意に甘える事にした俺は誘導された席（教室のちょうど中央）に向かい腰をゆっくりと下ろす。

正直の所、助かった……。どこのクラスに編成されたかは知つていたが、席までは知らなかつた。さつきの男子生徒に感謝しよう。

席に着いた俺は机に肘を置いて、それを顔の支えにして今日一日、ボーッと過ごす事に決めたのであつた……。途中、俺のマスク姿を中心してかクラスメイトたちから色々な物を贈呈されたが 決してカツアゲをした訳ではない事をここに誓う。

昼食時になり、俺の机には贈呈された様々な物で溢れ返つていた。全体を占める割合はスナック菓子が六割、デザート類が一割、軽食飲料水が一割、その他（思春期男子の必須アイテム）一割だ。

どう処分していいものかと、ブツを眺めながら考えていると田の前にビニール袋がひらひらと舞い落ちて来て、俺は思わず視線を上に向ける。

視線の先には見慣れた女子生徒が　　摺木麻耶が目の前に立っていた。

「えっと、摺木……さん？」

状況が理解出来ずに首を傾げながら彼女に話しかけると何も答える事無く、摺木は徐に卓上に散乱していたその他（思春期男子の必須アイテム）の一つを手に取った。

あつ……。隠すのを忘れていた……。しかも、タイトルが「口リつ子、大集合！　お兄ちゃん大好き？」と丁寧にサブタイトルまで書かれていた。

うわ……。これまた、誤解を招くよつたタイトルの物をお取りになつたな……。

摺木は無表情で何も語る事無く「口リつ子、大集合」なる本を見続ける。

恥ずかしい！　恥ずかし過ぎるぞ、おい！　俺の物じゃないのになんなんだ、この恥ずかしさは！　誰の物か分からぬ物のおかげでこちとら羞恥プレイにさらされたぞ、コノヤロー？

最後のページまで見終わったのか摺木は静かに本を閉じて小さく息を吐いた。

「摺木さん、これにはその～色々と訳があつて……」

「分かっているわよ。クラスの男子たちからのお見舞いの品でしょ？　うん、ちゃんと分かつてるから……。でも、もし新堂君がこんな性癖の持ち主だったとしても私は真実をしっかりと受け止めてあげるから……」

分かつたと言つておきながら少し蔑んだよつた冷たい視線で見つめる摺木に俺は先ほどのビニール袋を手に取つて、それを頭から被つて顔を隠す。一時的の処置だが摺木の視線から逃れる事に成功し

た。

わあ～、辺りが真っ白で何も見えないや～。

しかし、俺の安息の時間がすぐに終わりを迎える。摺木が被つていたビニール袋を淡々と引っペガして心なしか怒つているように見受けられた。

「……新堂くん

「あつ、はい！ 何でしようか！」

「コレ、没収ね」

いつのまにか摺木が綺麗に重ねたその他（思春期男子の必須アイテム）を指さして静かに問い合わせて来た。

「あつ……い、いいぜ。好きなようにしてくれ！」

「何？ 少し名残惜しいのかしら？」

「い、いえ！ 友人たちの気持ちをムゲにするのが心苦しくて……」

「そう？ でも、没収ね」

「……はい」

返事をするや否や摺木は黙々とその他（思春期男子の必須アイテム）たちを俺の卓上から持ち出して、どこに持つて行くのか分からぬが教室から出ようとした所で急に立ち止まってこちらを振り向いた。

「新堂くん」

「あつ、はい。何でしようか？」

「そこのプリンント、私の代わりに生徒会室に持つて行ってくれないかしら？ ほら、私はご覧の通り手が離せないから……」

そう言いながら摺木は視線でプリンントの位置を指示した。プリントは黒板前の教卓の上に束になつて置かれており、それを見つけた俺は軽く頷いて見せた。

俺の反応を見てから摺木は軽く会釈をして、その他（思春期男子の必須アイテム）たちを持ってどこかに行ってしまった……。

摺木を見届けた後に俺は小さく息を吐いて、肩を落として頃垂る。

アイツも俺と同じクラスだったのか……。何て言うか、格好悪い所を見られたなあ、勘違いしてなかつたらしいが……。

不安を抱きながら俺は摺木に頼まれた仕事をするべく立ち上がり、教卓に置かれたプリントの束を持って教室を後にした。

しばらく廊下を歩きながらある重大な問題に直面する。

生徒会室つて……どこだ？

高等部校舎内にあるのか？

それとも部室棟にあるのか？

ふむ、どこにあるのか分からんが……とりあえず中庭にある学校案内の地図を見ればどこにあるか分かる、か……。

俺は高等部校舎を出て、初等部、中等部、高等部の校舎に囲まれて設計された中庭に向かうと、俺が求めていた学校案内の地図を早くも発見する。

俺のように時々迷う輩がいるために造られた地図みたいだが……無駄に広すぎるのがいけないんじゃないのか？

まあ、愚痴を言つっていても仕方ないか。それにしてもこの中庭は豪勢だよなあ。

学校案内の地図を見つつ、少し辺りを見渡した。

ここの中庭は全校生徒の憩いの場になつており、中庭の中央には噴水。後は綺麗に整えられた芝生や花々が咲き誇る花壇などがあり、庭園のようになつていて、その近くには学食兼カフェがあつたりする。

昼のポカポカ陽気時には昼食を食べ終わった生徒たちが芝生の上で昼寝をしたり、談笑したりと人で賑わいを見せている。かくいう俺も昼食後にはここに来て噴水前のベンチでお世話になる事がある。良く眠れるせいか、たまに夕刻時まで眠つていた事がある。あの時はさすがにビビつて少しの間ここに来るのを自粛して、いた時期があつた。

ふむ、今となつては良い思い出である。

俺は学校案内の地図で生徒会室の位置を確認する。生徒会室は時計塔にあるらしく俺は時計塔を田指す事にした。

しかし、よりもよつて時計塔か……。

小学生の頃、初等部校舎から見えた少し古ぼけた大きな建物に興味本位で近づいて行つた俺はそれに見惚れないと、地響きのような大きな鐘の音が突然鳴つたものだから驚いてしまつた。その際、足がすくんでしまいしばらくその場から動けなくなつたのを覚えている。

間近である鐘の音を それも小学生の頃に聞けば、そりやゝ獰猛な化け物が吠えたと勘違いしてしまつだろ。
はあゝ今となつてはこれも良い思い出……なのか？

ああ、もう！

俺は恥ずかしい思い出をわざとかき消す為に頭を搔いた。

だけど、消そうとする度に鮮明にその恥ずかしい記憶がよみがえつてくる。そして、俺が消そうと必死になるにつれて周りで談笑していた生徒たちが徐々にではあつたが遠退いて行つた……。

これは、アレだよな……。色々と勘違いされてそうだ……。一人だけマスクをして目立つ中、さらに必死の形相で頭を搔くなんて動作は誰がどう見ても奇行にしか見えん。

今日は厄日、なのか……？

がつくし、と肩を落とした俺はとぼとぼと歩きながら時計塔に向かつていると前方の道端に黒い物体が落ちていた。

いや、倒れていた……？

中世的な黒いドレスに身を包む金髪の等身大の人形（？）がうつ伏せで倒れており、周りを歩く生徒たちには見えていないのか全員スルーだった。

ふむ、やはり人形なのだろうか。しかし、誰がこんな物を　ゴロゴロゴロ～！

ん？　何だ、今の地響きは　雷の音か？

俺は空を見上げて見渡した。だけど、雲一つないピーカン照りだつた。

あれ？　聞き間違いか。まあ～いいや、どうせこれから生徒会室に行くんだから人形が中庭に不法投棄されている事を報告すれば済む事だらう。

予定通り俺は時計塔にある生徒会室に向かって足を進める事にした。人形を踏まないよう気を付けながら歩いて　バタン！

突然、目の前が真っ暗になりどうしてか鼻がもの凄く痛かつた……。状況を把握するべく辺りを見渡すと俺はどうやら受け身も取らず、ダイレクトで地面に顔から倒れてしまつたようだ。

気を付けて歩いていたのにダサいなあ～。

倒れてしまつた際に辺りに撒き散らしたプリントを回収し、立ち上がろうと試みたが足に力が入らなかつた。それどころか、自分の足じゃないように重かつた。変に足を挫いてしまつたのだろうか？　そう思いながら自分の足に視線を向けると俺の両足にさつきの人体がしがみついたままうつ伏せになつて倒れていた。

何、この状況……。もしかして、これは呪いの人形なのか？　俺を地獄に引きずり下ろすために目の前に現れたの、か？　それなら合点がいく。どうして周りの生徒たちがスルーしていたのか。それは俺にしか見えない死の代弁者たる死神だからだろう。

何だそうか。俺、今日死ぬのか……。結構、お早いお迎いだなあ

……。

開き直るように俺は天を仰ぎ見た。今まであつた様々な映像が頭の中に流れてこれがフラッシュバックなるモノなのだと理解した。

すると、「ロロ、ロロ、ロロ～！」と先ほどの地響きが再び聞こえた。また、か……。でも何の音だろうか？ 辺りを見渡しても地響きが鳴るような物は置いてないし、鐘が鳴る時間でもない。俺はふと、人形に視線を向けた。

まさか、な……。だけど、この人形にしがみつかれている部分が妙に生温かい。人形じゃないのか？

俺は確認するべく、辺りを少し見渡してから見つけた。おあつらえ向きの小枝を掴み取つて、人形（？）の頭を突いてみた。突く際は鼻を摘む事を忘れずに……。

「……痛いわ、阿呆……」

うつ伏せのまま霸氣のない声を上げた人形　いや、少女……。聞き間違ひじゃない事を確認するべく、俺はまた小枝で少女の頭を突いてみた。今度は少し強めに……。

「痛いと言つとろうが！」

怒号を上げながら顔だけ起こした少女の瞳は綺麗なエメラルドグリーンでそのまま宝石に出来そうなほど澄んだ色で左目を眼帯で隠し、肌も透き通るように白くて本当に人形みたいな風貌の少女だつた……。

第一話「久しぶりの登校」 其の三

「……お主、なぜ鼻を摘んでおる?」

不思議そうな表情を浮かべながら元人形(?)だった、少女が話しかけて来た。

外人さん 何だろうか? 普通なら俺のナリを見て怒る所だろうに……。それならそれなりの対応を取らねば、な……。

「ああ、この国の風習みたいな物だ。地面に落ちてる物の安全性を確かめる時は鼻を摘みながら小枝で突く、これ常識」

俺は堂々と少女に嘘を吐いてやつた。

この嘘に少女は真摯に受け止めてくれたのか「ふむふむ」と感慨深く頷いていた。

「実に滑稽な様よな~。我はてつきり我的事を汚物扱いしていたのかと思つたわい」

「ヤダな~。そんな失礼な事をする訳なかろつ!」

オーバー気味に俺は顔の前で手を左右に大きく振つて否定する。

「そんな事よりも、お前はどうしてこんな道端で寝てたんだ?」

「それがじやのあ~。腹が減つて動けなくなつてしまつたのじや

「ああ、それで……」

なるほど……さつきの地響きもコイツの腹の音つて訳か。しかし、化け物染みた音だつたよな~。

「お主。我に何か食わせてくれんかのあ~。その引き締まつたモモ肉でも良いんじやが……」

涎を垂らしながら言つた少女の視線は強く掴んで離さない俺の足に向けられていた。

ヤバい……。腹が減り過ぎて幻覚を見ているようだ。このままでは本当に俺の足を食われかねない。どうしたら つて、あつ! あるじやないか。おあつらえ向きのブツたちが教室に……。

「分かつた。分かつたから俺の足を離してくれないかな？　このままだつたら動けないだろ？」

「ふむ、承知した。じゃが、条件がある」

「何だ？」

「とんずら防止のためにそこのレプリカどもは我が預かる「れぶりかども？　ナニソレ」

「分からんヤツじやな～。それじゃよ、それ。そこの魔導書の事じや」

少女は顎を使ってその魔導書と呼んだ、俺が手に持つプリントの束を示した。

「ああ、コレか……。分かつた。じゃ～そこのベンチにでも腰掛けで待つてくれ。すぐに戻つて来るから」

近くにあつたベンチを指さして、少女はそれを見て「承知した」と頷きつつプリントの束を俺から強奪して、少しおぼつかない足取りでベンチに向かい腰掛けた。

ふらふらじやねえ～か。はあ～全く……。

少女から一時的に解放された俺は頭を搔きながら自身の教室に足早と向かつた。

卓上に散乱していたブツたちを摺木から貰い受けたビニール袋に詰められるだけ詰めまくつて、パンパンに弾けんばかり膨れ上がったビニール袋を担いで腹を空かせた少女の元へと戻る。傍から見れば季節外れのサンタクロースに見えなくもない風貌だらうな～と思つた。

もし、誰かが俺の姿を見て何かを言つて来たら俺はこう言つてやるんだ「先取りだ、コノヤロー」と……。だけど、誰にも何も言われる事無く少女の元に着いた俺は心なしか侘しさに苛まれた。

「御苦労……つて、どうしたのじゃ？」

「いや、現代人つて冷たいんだなあ～つて……」

「この数分の間に何があつたのじゃ……」

嘆息交じりに少女は俺が抱いで持つて来たビニール袋を手に取ると田をキラキラと光らせながら物色し始め、俺は彼女の隣に腰を下ろした。

相当腹が減つていたのだろうパッケージを見ているだけで涎が分泌されて、ジユルジユルと事あるごとにすすつていた。

「なあ～聞いてなかつたんだが、お前の名前は？」

「ん？ ああ、イリヤじゃ。イリヤ・シュガーライトじゃ。しかし、これは美味じゃのあ～」

イリヤはおにぎり（鮭）を頬張りながらそう答えた。

やはり、外人さんだつたのか。うん、確かに西洋のお人形さんのようだ。しかし、凄い食欲だな～。鮭おにぎりを食べ終わつたと思つたら、続けてまたタラコおにぎりを美味しそうに食べ始めた。だけど、少し疑問が残つた。外人さんつてのは分かつた。でも、ここまで流暢に少し古臭い口調ながらも日本語を話せるとは恐れ入つた。

イリヤ・シュガーライト、天才少女なのか？

三つ目のおにぎり（ツナマヨ）を頬張る彼女を横目で眺めながら、俺はある事に気付いて、嬉しさのあまり手をポンと叩く。

「ああ、お前。本当の名前は佐藤光だりさとうひかる

この言葉にイリヤは「ブワー」と口の中の食べ物を噴き出して、涙目になりながら少しづめ返る。

「だ、大丈夫か？」

「大丈夫じゃないわ、戯け者！ 誰がサトウヒカルじゃ阿呆！」

「いや、シユガーライトなんて変わつた名前でしかも流暢に日本語を話すからや。つい考察しちゃつた、テヘ～」

「何が『テヘ』『じゃ！』おかげで我が食料が台無しになつたではないか！」

口周りに米粒を付けながら怒るイリヤの姿が滑稽でもう少しだけ佐藤光ネタでいじつてやろうかとイタズラ心に火が点いてしまつた。

「白状するなら今の内だぞ。後になつて本当はイリヤ・シュガーライトとじやなくて佐藤光ですなんて表明はやめてくれよ」

「だからー！ 我の名前はイリヤ・シュガーライトと何度言つたら」

「分かつてゐつて。事務所の方針なんだろ？ 厳しいもんな、この業界は……。千葉県出身なのに星人キヤラ守らなきやならんかつたりするしな……」

「……何じや、そのリアリティーある言い草は……。じゃが、我はセイジンでもなければチバケン出身でもないぞ！」

「分かつてゐつて、関東じやなくて関西か？ いや、間を取つて北海道か？」

「どう間を取つたのか分からんが 言葉から推測するに絶対違うだけは分かつた」

「ふむ、じゃへどこなら納得なんだ？ 九州か？ 四国、中国か？」

？

「……日本以外の選択の余地はないのか？」

「なるほど、外タレつて事ね。じゃへやはり、お前の出身地は関東か……」

「何故、そうなる？」

「いや、かの有名な『メンテーター』も埼玉県出身つて話がだな……」

「もう、良い！ お主は根本的に色々と履き違えておるー 東洋

人は皆こうなのか？」

ガブリ、と自棄食いのように包装を取らずにそのままおにぎり（梅）を頬張り、違和感に気付いたイリヤはイライラしながら包装を取つて再びおにぎりを頬張るが、外人さんには少々馴染みがない梅

を口にして、その酸っぱさのあまり表情を歪めた。

「き、貴様～！ 謀つたなあ！」

ポカポカ、と俺にハツ当たりし始めたイリヤの口周りには案の定、米粒が付きっぱなしで怒られているのも関わらず俺は思わず笑ってしまった。

さて、そろそろ潮時かな。俺もこんな事している場合じゃないしな……。

イリヤに入質（？）として捕らえられていたプリントの束を回収して、徐に立ち上がった俺は生徒会室がある時計塔に向けて歩き出した。

すると、イリヤがグイっと俺の制服の裾を引っ張つてそれを妨げる。

「まだ、何があるのか？ 俺はこいつ見えて忙しい身なんだが……」「……逃げるつもりか？」

「は？」

「逃げるつもりかと聞いてある」

少し語気を強めて繰り返して述べたイリヤの言葉に俺は正直何の事を指しているのかが理解出来ずに呆けてしまった。

「あれだけ我的事を愚弄しておいて謝罪もなしにどこかへ行こうなど断じて許さん！」

俺にからかわれた事が気に障ったのかイリヤは憤りを感じずにはられないと軽く拳を握つていた。

ふむ、少々やり過ぎてしまったか……。

「すまん！」

深深く頭を下げて俺はイリヤに謝罪した。

当の本人はまさか俺が素直に謝罪をするとは思っていなかつたよ

うで目が点になつて呆けていた。

やる事やつたんだし、これでいいだろ？。

俺は気を取り直して時計塔に向かつて歩み始めよつとした所、またイリヤに制服の裾を引っ張られて妨げられてしまつた。

「何だよ」

「……騙されんぞ」

「はい？」

「この国では誠意を込めた謝罪の事を『土下座』と申すらしいな。じゃが、お主がやつたのはただの会釈じゃ。よつて、先ほどの謝罪は無効。本当に反省しているのなら今すぐひざまずいて土下座をやらをやつて見せよ！」

フフフ、と少し諂ひしげに語ったイリヤの姿に俺は額を押えて嘆息を吐いた。

何、仕様もない事を知つているんだよ…………。

「断る！」

「何故じゃ！」

「いや、土下座するほどの大罪を犯した覚えがないんでね。じゃ

「俺はこれで」

「行かせん！」

俺が時計塔に向かおうとしたらいリヤが目の前に回り込んで来てこれ以上先に行かせんと『ホールキーパー』みたく両手を大きく広げて妨害して來た。

「この先に行きたいのなら我を倒して行くが良いー！」

「……ああ、そうするわ

お言葉に甘えて俺はゆっくりとイリヤに近づいて行き、俺の行動に身構えたイリヤの無防備となつた額に手を伸ばして力の限りの『パンツをかましてやつた。

パチーン、と思いのほか綺麗にクリーンヒットしたせいでイリヤは額を押えながら身悶える。

「い、痛いではないか。阿呆……」

涙目になりながらイリヤは俺の事を軽く睨み返して來た。

「いや、倒してから行けって言つもんだから俺はその言葉通りにやつただけなんだが……」

「手加減を知らんのか、手加減を……」

「じゃ～倒したから俺は先に進むぞ～」

額を押えながら未だに痛がり続けているイリヤを後田に俺はさつさと時計塔に向かつて歩き出した。

「ま、待て！ まだ、終わつとらんぞ！」

後方からそんな怒鳴り声が聞こえて俺は嘆息を吐きつつ、渋々ながら後ろを振り返つてやつた。

「まだ、何かようですか～？」

「何じゃ、その面倒臭そうな対応は！」

「……実際、面倒臭いし」

「なあ～にい～おお～！ いつなつたら我も本氣を出す！ あとで吠え面をかいでも知らんぞ！」

ブンブン、と怒号を上げながらイリヤは唐突にドレスの裾をたくし上げ、ガーターベルトで止めたひざ丈ほどのストッキングの隙間から手のひらサイズの白い棒状の物を取り出して、それで地面に何かを描き始めた。

その様子からイリヤが取り出したのはチョークだと理解したのだが、一体彼女が何をしようとしているかまでは分からなかつた。

すると、描き終えたのかイリヤが徐に地面に描いた円陣（恐らく魔法陣）の中心部分に立ち止まつて不気味な笑みを浮かべながらこちらに視線を向ける。

「……ククク。まさか、下等種」ときにこれを使う時が来ようとは正直思いもよらなかつたぞ」

「えつと……もう、行つていいいかな？ そろそろ予鈴がなるだろ

「うし

「フフフ、我的本氣の姿にビビッつておるわ」

「いや、そうじや」

「言わすとも分かつておる。じゃが、我を愚弄した罪、その身に刻んでくれるわ」

不気味な笑みを浮かべながらイリヤは徐に眼帯を外した。眼帯で隠されていた左目が露わになり、左目はエメラルドグリーンではなく己の髪の色と同じく金色に輝く穢れの無い瞳の色だった……。

「我、ここに汝の御靈を呼び出さん。我的言靈に応えよ。我的望みを叶えよ。出でよ、地獄の門番ケルベロス！」

イリヤが謎の呪文を唱えた瞬間、辺りが静まり返り突風が吹き始めた ような気がした……。

「……」

「……」

「我、ここに汝の

「じやくな~」

「ま、待つのじや！」

「もう、いいだろ？ 十分、相手してやつたんだ。解放してくれよ~」

「まだじや。今のはただの余興じや。これからが本番、よく耳に焼き付けるが良い~」

そう豪語したイリヤはゆっくり深呼吸をしてから右手で口の形を作った指を口に近づけて指笛を吹いて 吹いて、吹いて、吹いて

……？

イリヤが指笛を吹く度にブシュー、と空気が抜ける音が鳴り響いてなかなか綺麗に指笛が鳴らず、徐々にではあつたがイリヤの耳がうるうると涙目になりつつあった。

「分かった。イリヤの気持ちは痛いほど伝わったからさ、もう無

理すんな

「む、無理などしちょりと……」

声を震わせながら頑なに指笛を吹き続けるがやはり綺麗に鳴らす事は出来ず、憐れに思つた俺は彼女が吹くタイミングに合わせて気付かれないよう指笛を吹いてやつた。

すると、左方の草陰からガサガサと草が揺れ動く音が鳴り、そこから黒い物体が飛び出して来て、イリヤの腕の中に収まつた。

「や、やつた！ 成功じや！」

「お、おー！ オー？」

突然の事で俺は驚いてしまつたが、よくよく見てみるとただの黒いチワワだった。

「ククク……。だから言つたではないか、吠え面をかく事になる」と……

召喚に成功（ほほ、俺のおかげだが……）して本来の調子を取り戻したイリヤが俺の呆けた姿を見て、不気味な笑みを浮かべながら見下して来た。

「まあ、確かに驚いたけどさ、チワワって……。せめて、地獄の門番ケルベロスって名前負けしなつよ、そこはドーベルマン辺りが妥当だろ」

「ドーベルマンなれ、こわ ゴホン、チンケではないか。チワワこそ高貴なる我に相応しい召喚獣よ」

「ああ、確かに……。地獄の門番どじろか白毛の門番すら出来なれそうな所がお似合いだよ」

「ば、馬鹿にしよつて……。ハつ裂きにしてくれるわ。行け、ケルちゃん！」

「わん！」

イリヤの掛け声でケルちゃんこと黒チワワが彼女の腕から飛び出して来て、こちらに向かってトコトコ、と歩み寄つて来た。

ハアハアハア、とどことなく獣猛そうな息遣いをしながら俺の事をつぶらな瞳で見つめるケルちゃんに少し気後れしたが、めげずに立ち向かう事にした。

まず、初めに俺は中腰になつてケルちゃんの事を凝視した。ケルちゃんのつぶらな瞳に負けないよう目をずっと見続けてやつた。頃合いを見て、俺は徐に右手を差し出した。

「お手…」

「わん！」

ポン、と俺の右手に前足を乗つけてくれたのを見て、続けてまた今は左手を差し出してみた。

「おかわり！」

「わん！」

また、俺の左手に前足を乗つけてくれたケルちゃんに俺は 俺はつ！

「可愛いな、コノヤローー！」

頭を撫でたり、抱きついたりと某畑さんほどじゃないけれど、それなりの熱いスキンシップをケルちゃんに施してしまつた…。

「わ、我のケルちゃんがあ！」

俺たちの熱い間柄に嫉妬したのかイリヤが膝を着いて悔しそうに唇を噛みしめる。

「はつはつは。ケルちゃんはお前じやなくて俺を選んだようだ

「ムムム……。こうなつたら、奥の手じやー！」

「……まだあるのかよ

イライラしながらイリヤは懐から着痩せしていたにも程がある、枕ぐらの大きさのツギハギだらけで目がボタンになつているクマのぬいぐるみを取り出して。それを大事に抱きかかえたイリヤは、

「Establishment of the soul (魂の定着)」

と、念を込めるように呟いた。

すると、イリヤに抱きかかえられていたクマのぬいぐるみが腕から飛び出して独りでにとぼとぼ、と歩き始めた。

それを見たケルちゃんは怖気づいて俺の足元に隠れ、俺はあまりの事に目を見開いて驚いてしまった……。

ぬいぐるみが動いている？ でも、ただのパペットだろ？ 何らかのトリックで動かしているに違いない。

クマのぬいぐるみが動く仕組みに悩んでいる俺を嘲笑うかのようないリヤは不敵な笑みを浮かべながら見つめていた。

しかし、そんな優越感も束の間。クマのぬいぐるみの動きが突然、止まつた……。

それを見てすぐにぬいぐるみを回収したイリヤはぬいぐるみを抱きかかえながらこちらを見据えた。

「ど、どうじゃ。恐れ入つたであろう？」

「ああ、恐れ入つたよ。どういう仕組みで動いてたんだ？」

「ちひちひち。それは秘密じゃ。何なりもつと凄い物も見せてしんぜようぜ」

誇らしげにそう語るとイリヤはぬいぐるみに耳打ちをし始める。しばらく、その様子を見届けてごとに準備が整ったのか、イリヤが口を開いた。

「待たせたな」

【待ちやせたな、下等ちゅ】

「は？」

ぬいぐるみがしゃべったのか……？

【我が主の力にビビつておるわ】

「そう言つでない。ベアトリー・チヨよ。我の偉大さがいけないの

じゃ。偉大すぎるのも難儀じゃの〜

【ケラケラケラ】

「……」

何？このしょぼいコントは……。どうせ録音した音源を再生してるだけだろ。それに出だし早々噛んでる……。はあ～。驚いて損したわ……。

「なあ～イリヤ。一つだけ聞きたい事がある

「な、何じゃ？」

「お前……友達いないだろ」「

「ぐつ……。お、あるわい！ 友人の一人や一人、百人や千人。ワールドワイドに展開してあるわ！」

「そうか……。なら、携帯貸せ。ワールドワイドに展開しているぐらいなら携帯の登録件数はびっしりのはずだろ？ まさか、ワールドワイドに展開している奴が携帯の一つも持つてないって事はないよな？」

「……承知した」

渋々ながら了承したイリヤは腕の裾から携帯電話を取り出して俺に投げつける。それを受け取った俺はイリヤの携帯をイジって登録番号を確認する。

すると、自宅の電話番号と両親の電話番号らしきもの、それと身に覚えのある電話番号の四つしか登録されていなかった。

「……」、これで満足か

身体を震わせながら呟いたイリヤの姿を見て、俺は徐に自分の携帯をポケットから取り出して勝手に赤外線通信を使用して連絡先を交換した。

「な、何をしてある」

「いや、何となくな。ほら

連絡先を交換し終わったイリヤの携帯を彼女に向かって軽く投げて、それをイリヤは受け取ると本当に連絡先が交換されたのかと、慌てた様子で確認し始めた。

「……しんどう、しん？」

「ああ。それ俺の名前な」

「まさか、彼奴の……？」

「ん？ 何か言ったか？」

「いや、なんでもない。なんでもないぞ、シン」

「そうかい」

すると、突然辺りに大きな鐘の音が鳴り響き、その音に俺は思わず額を押えてしまう。

「アチャ～。予鈴が鳴つてしまつた。おい、イリヤ」

「な、何じや？」

「それ、全部やるからさつさと教室に戻れ。俺は行かなきゃなん所があるから、もし何か用事があるなら携帯に遠慮なく掛けてこい。じゃ～俺は行くから」

摺木に頼まれたプリントの束を大事に抱えて俺は生徒会室がある時計塔に向かって走り出した。後方からベアトリー・チヒの声で「あ、ありがと～」と言う言葉に見送られながら……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0274ba/>

ツレヤん...？

2011年12月31日21時46分発行